

# マイ・ストーリー

## 坂井未知

さかい みち

### わたしはこんな人

はっきり言って、がんこ者です。がんこなのは小さいころからで、小学生のとき、母や先生に怒られても「自分のこころが悪かったんだ」と納得するまでは、絶対にあやまりませんでした。また、慎重なところがあって、すぐには決断しません。でも、一度目標を定めてしまうと、それに向かってまっしぐらに進んでいきます。ちょっとやそっとの障害では方向を変えません。

コンピュータのことはよくわからない、メールよりも手紙のほうが好き、 트렌디드라마よりも落語や時代劇が好きという「アナログ人間」です。そのせいで、小学5年生から中学1年生まで、友だちに「ばあちゃん」と呼ばれていました。

わたしは、「生活のなかで楽しめることは、楽しんでしゃべえ！」と思っています。何ごとにも自分から積極的に取り回して楽しみます。

### おいたち

#### 小さいころ

わたしは、1983年に千葉県<sup>1</sup>で生まれました。小さいころは、外で遊ぶことが多い元気な子でした。年の違う子と遊ぶことが多かったので、人

づきあいも自然に覚えました。

小さいころはコロコロに太っていました。外で走りまわっているわりには運動神経が鈍くて、幼稚園のときにブランコから落ちて頭を1針ぬったり、箱ブランコに足をはさんでしばらく歩けなくなったりと、けがもよくしました。風邪をひくことはあまりありませんでしたが、扁桃腺をはらして高熱を出すことがよくあったそうです。

#### 小学生のころ

小学生のころから昆虫や動物が大好きでした。母によると、昆虫や動物の図鑑を「なめるように」見ていたそうです。小さいころは家の近くにアマガエルがたくさんいて、よく捕まえました。アリ、チョウ、カブトムシ、カタツムリ、トカゲ、カエル、金魚、亀など、いろいろなものを飼いました。動物園や水族館も好きで、とくに上野動物園にはよく行きました。父と母を待たせて、動物園を1人で2周も3周もしていました。とくに猿山はおもしろくて、ずっと見ていると飽きません。どれがボス猿か当てたりしていました。小さいころはただ動物を眺めているだけでしたが、そのうち、本を読んで得た知識をもとに、いっしょに行った家族にあれこれ説明するようになりました。学校ではずっと学級委員<sup>5</sup>や班長をやっていました。けっこう仕切り屋なのです。放課後は、

週に1回、習字を習いに行っていました。それ以外の日は、家に帰るとすぐ近所の友だちと外に出て遊んでいました。家の前の道路がおもな遊び場で、縄跳びやおにごっこ、ドッジボールなどをして遊びました。

外で遊ぶのも好きでしたが、家で読書をしたリ、祖母や祖父に昔の話を聞いたりするのも好きでした。

## 中学生のころ

中学生になって剣道部に入りました。隣の家の幼なじみが剣道をやっていたので、自分もやってみようと思ったのです。軽い気持ちで入ったのですが、剣道部は市川市の大会で優勝したり千葉県大会に出場したりするほど強かったので、練習はとても厳しくてつらいときもありました。

あいかわらず動物や生きものが好きで、関係のありそうな本をかたっぱしから読んでいました。学校の図書館にあった動物関連の本の貸し出しカードには全部、わたしの名前が入っていたくらいです。

学校から帰ってくると、母と夕飯の買い物に行きました。そのあとひまなときは、2階の祖母の部屋に行き、いっしょにテレビを見たり落語を聴いたりしていました。わたしの家は2世帯住宅で、2階を父方の祖父母が使い、1階に両親とわたしたち姉妹が住んでいます。祖父や祖母と話をするのは、友だちと話をするのは違う楽しさがありました。とくに昔の話を聞くのが好きでした。また、夕飯をつくったり、編みものをしたりしている祖母の様子を見ているのも好きでした。な

ぜかゆったりとした気分になって、落ちつくのです。

## 標茶とのであい

わたしが中学生のころ、千葉県市川市と北海道標茶町は、「標茶・市川少年の船」という交流プログラムを実施していました。このプログラムには、小学生から大学生まで参加し、毎年交互に相手のまちを船で訪ねて交流していました。北海道に、しかも大きな船で行くというので、わたしも参加したいと思いました。

しかし、東京湾から標茶町までの2泊3日の船旅は、実につらいものとなりました。ひどい酔いにずっと苦しめられたからです。船の上で海にかかる虹を見たことだけが、船上で唯一のいいおもいでです。標茶の港が見えたときは、心の底から「助かったー」と思いました。陸に上がるとすっかり元気になって、カヌーや乗馬、標茶町の中学生との交流会、バーベキュー、キャンプファイヤーなどを楽しみました。このときに、標茶高校を初めて訪問し、校内見学をしたり、パターづくりをしたりしました。「なんて広くてきれいな学校だろう」と思いました。

## 高校生活

### 標茶高校へ

中学3年生になって、どの高校を受験しようかと迷っていたときに、標茶高校のことを思い出しました。標茶高校には寮があって、北海道以外の地域からでも進学することができるのです。獣医

になるのが小学生のころからの夢で、高校卒業後は北海道の大学に進みたいと思っていたので、北海道の高校に通っていたほうが情報を多く得られると考え、標茶高校を受験することにしました。家族と離れることや寮生活をするに對する不安は不思議とありませんでした。両親は最初は驚いたようですが、とくに反対はしませんでした。北海道に行くのが3年早まっただけのことだと思っただけではないでしょうか。

標茶高校に入学すると同時に寮生活が始まりました。寮では、規則正しく生活しなければなりません。食事やそうじなどの時間が決まっているので、いつも時間を気にして行動しなければなりません。それが、少しきゅうくつに感じることもあります。でも、なかなか話をする機会のない上級生とも仲よくなれるのは寮生活のいいところだと思えます。

## 週末ホームステイ

寮は、2日以上連休になると閉まることになっています。だから、土曜日に授業のない週末(第2週と第4週の土日)には、ほとんどの寮生は家に帰ります。わたしは市川の家に戻るのはいへんなので、同級生の直ちゃんの家でホームステイをしています。直ちゃんの家は、学校から40キロ離れた標茶町虹別で酪農を営んでいます。直ちゃんのお父さんとお母さん(わたしは「パパさん」「ママさん」と呼んでいます) おじいさん、直ちゃん、直ちゃんの弟のよしきくん、それと直ちゃんのお姉さんが3人の8人家族です。また、酪農の仕事を手伝っている研修生も住みこみで働いています。

ホームステイをする週は、金曜日の夜におじいさんが車で迎えに来てくれます。土曜日は、よしきくんの相手をして半日くらい遊びます。あとは、買い物に行ったり、リビングでくつろいだり、勉強したりして過ごします。そして、日曜日の夕食後、寮へ戻ります。

標茶高校に入る前の唯一の心配は週末のホームステイでした。でも、実際にホームステイをしてみると、とてもいい人たちだったので安心しました。最初こそ緊張しましたが、今はとてもリラックスしています。自分の家だとだらけがちですが、ホームステイをすることでメリハリのある生活ができるのはとてもいいことだと思います。

ホームステイをしない第1週と第3週の土日は、寮で友だちと過ごします。残念なのは、まちに1軒しかない本屋さんが日曜日は休みなことです。車がないので、学校の近くにしか行けません。だから、ホームステイをしない週末は少しつまらないです。

## 標茶高校について

わたしは標茶高校が好きです。校内には豊かな自然があります。動物の姿を目にすることはまれですが、鳥のさえずりを耳にしたり、動物の足跡を目にすると、彼らの存在が実感できます。

また、先生たちがとてもユニークで個性的です。バードウォッチングやスノーボード、釣りなど多彩な趣味をもつ先生が多く、そういう話になると止まらなくなってしまう。わたしたちが住んでいる寮には、毎晩先生たちが交代で2人ずつ泊まりこみます。宿直の先生たちと話がはずん

で、気がついたら2時間たっていたということもありません。

それから、天体望遠鏡やホロスコープ、バイオ技術用の設備といった最新の設備を取り入れ、総合学科制を導入したりするなど、新しいことに積極的にチャレンジしています。

## 高校生自然環境サミットに参加

1年生の8月、群馬県立尾瀬高等学校が主催した高校生自然環境サミットに参加しました。このサミットは群馬県で行われ、環境教育を積極的に実践している全国の16の高校から51名の生徒が参加しました。標茶高校からは、わたしを含めて4人の生徒と引率の先生が参加しました。サミットは「地球環境」をキーワードに、情報交換をしたり、自然と人間とのかかわりについて考えたりして、環境学習をさらに深めていくために企画されました。日光国立公園内の尾瀬ヶ原で水質調査や植物の観察をしたり、参加校の高校生たちと交流を深めたりしました。ふだん、友だちとは動物の話をおもしろくないのですが、サミットの参加者はみんな動物や植物の知識が豊富で、話を聞いてとても楽しかったです。

今いちばん大切だと思っているのは、このように人と人の「であい」です。ちょっとしたきっかけで北海道にやってきて、たくさんの友だちと会うことができました。自然環境サミットでは、群馬や鹿児島などほかの地域の高校生とも友だちになれました。地元の高校に入学していたら、こういう「であい」はなかったでしょう。考えてみれば、わたしが坂井家に生まれたのも不思議なことで

す。奇跡とも言えるこれらの「であい」を大切にしたいと思います。

## 将来について

小学校低学年のころは、動物園の飼育係になりたいと思っていました。そのうち、本やテレビを見て獣医という仕事があるのを知って、獣医にあこがれるようになりました。今は、高校卒業後、北海道の大学で獣医学を学び、獣医になって南米やアフリカで野生動物保護の仕事に携わりたいと思っています。

「人類は自然を破壊することで発展してきた」とよく言われますが、21世紀は今まで壊してきたものを再生させる時代だと思います。世界規模の公害や地球の温暖化などさまざまな環境問題を解決するためには科学の力が必要ですが、それ以上に1人ひとりの心がけが大切だと思います。たとえば、あき缶やペットボトルを資源ゴミとして出す、水や電気をむだづかいしない、こういう小さなことを1人ひとりが実践していかなければならないと思います。わたし自身はそういったことを心がけていますが、友だちなど身近な人たちにも考えてもらい、だんだんその輪を広げたいと思います。

## 家族・友だち

### わたしの家族

わたしにとって家族は、「ふるさと」とか「巣」という感じがするものです。離れていても必ずそこ

にあつて、いつでも帰ればあたたかく迎えてくれる。わたしのいいところも悪いところも、何から何までうけいれてくれる。そんな「巣」があるから、わたしはどこにでも行くことができます。その「巣」はなくなることはない、しっかりとしたもので、ホームシックになることはありません。標茶高校への入学を迷うことなく決められたのも、家族と離れることに不安がなかったのも、しっかりとした「巣」があったおかげだと思っています。

## わたしの友だち

友だちはとても大切です。中学生のとき、練習がきつくても剣道部をやめずにがんばれたのは友だちが励ましてくれたからです。高校生になって始めたバスケットボール部の練習をがんばれるのも「だいじょうぶだよ。できるよ」と言ってくれる友だちがいるからです。それに、家族と離れて暮らしているのに、楽しいことや悲しいことを何でも話せる友だちがいるのはとても心強いことです。寮の友だちがときどき「家に帰りたいよー」と言うことがあります。そんなときは、「みんなもそうなんだなあ」と思って安心します。弱いところを見せてくれるのもうれしいし、それがわたしへの励ましにもなるのです。

友だちからのプレゼントはみんな宝物です。幼なじみからもらった指輪や写真立て、手紙、写真など、どれも大切です。

友だち関係での悩みは、たとえばわたしはAさんもBさんも好きだけれど、BさんはAさんが嫌いとか、その逆だとか、板ばさみになることがときどきあることです。

## わたしのまち

### 学校のあるまち、北海道標茶町

初めて来たときの「歩道が広くてきれいなまち」という印象は、住みはじめた今も変わりません。豊かな自然と親切な人々に囲まれた環境は、わたしにとってもあつていると思います。

標茶で暮らしはじめていちばん驚いたのは、北海道のことばです。たとえば、てぶくろを「はく」と言ったりします。「はく」というと「靴をはく」「靴下をはく」など、足に関係するものにつかうと思っていたので、とても不思議でした。それから、「ゴミを捨てる」ことを「ゴミを投げる」と言うのにも驚きました。そのほか、居心地がいいことを「あずましい」、居心地が悪いことを「あずましくない」と言うのも、標茶に来て知ったことばです。

### 家のあるまち、千葉県市川市

自宅は千葉県市川市にあります。市川市は江戸川が流れ、緑の多いところです。広々とした空が広がる江戸川の土手を散歩するのが、とても気持ちよくて好きです。羽田空港や成田空港へ短時間で行ける便利な場所です。東京に通勤する人たちのベッドタウンとして発展する一方、『万葉集』<sup>11</sup>にうたわれている古いお寺などがあつたりする新旧が入りまじった「ふるさと」です。わたしの好きな旧の部分と、便利な新の部分の両方があるところが魅力です。